

一般国道10号上々呂バイパス建設関係発掘調査概要報告書

林 遺 跡

1988

宮崎県教育委員会

一般国道10号土々呂バイパス建設関係発掘調査概要報告書

林 遺 跡

1988

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会では建設省の委託を受けて、昭和61年度から一般国道土々呂バイパス建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しております。昨年度は水田部分と一部畑地の発掘調査を実施し、また本年度は畑地部分の本格的な発掘調査を実施しました。

一次調査では、古く遡る水田の確認は出来なかったものの、かえって伊形地域における水田の開発が色々な苦難を克服したうえで成り立っていることに、あらためて思いを及ぼすことになりました。それとは逆に、旧石器の遺物が検出されたことは、予想外の成果だと思われます。

二次調査では、引き続き掘立柱建物跡の検出が続けられましたが、地形的な制約のなかで大規模な建物が存在した可能性が考えられているようです。

こうした成果の積上げの上で県北の地域史が少しずつ紐解かれていくことになると思われます。なお、これらの貴重な調査の成果が学術関係者だけではなく、社会教育・学校教育の分野にも広く活用されるとともに、文化財保護行政推進のための一助となることを期待します。

発掘調査にあたって深い御理解と御協力を示された建設省の関係各位に深甚の謝意を表します。

昭和63年3月19日

宮崎県教育委員会

教育長 船木 哲

例　　言

1. 本書は、建設省九州地方建設局延岡工事事務所の委託を受けて実施した、一般国道10号土々呂バイパス建設予定地内に所在する林遺跡の発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は昭和61年の試掘調査を経て、61年・62年の二次調査が完了し、来年度以降に三次の調査が計画されている。なお61年の調査については、『宮崎県文化財調査報告書』第30集（昭和62年）に一部概略を報告している。
3. 昭和61年の試掘調査には、県文化課主事北郷泰道が当たり、一次調査には北郷と同主事近藤協、二次調査には北郷が当たった。
4. 試掘および一次調査では、水田跡の確認、発掘のため、プラントオバール分析を、宮崎大学助教授藤原宏志氏、および古環境研究所にお願いした。
5. 二次調査では、地理学的調査のため（財）山梨文化財研究所外山秀一氏に特別調査をお願いした。
6. 本書の編集・執筆には北郷が当たった。

本文目次

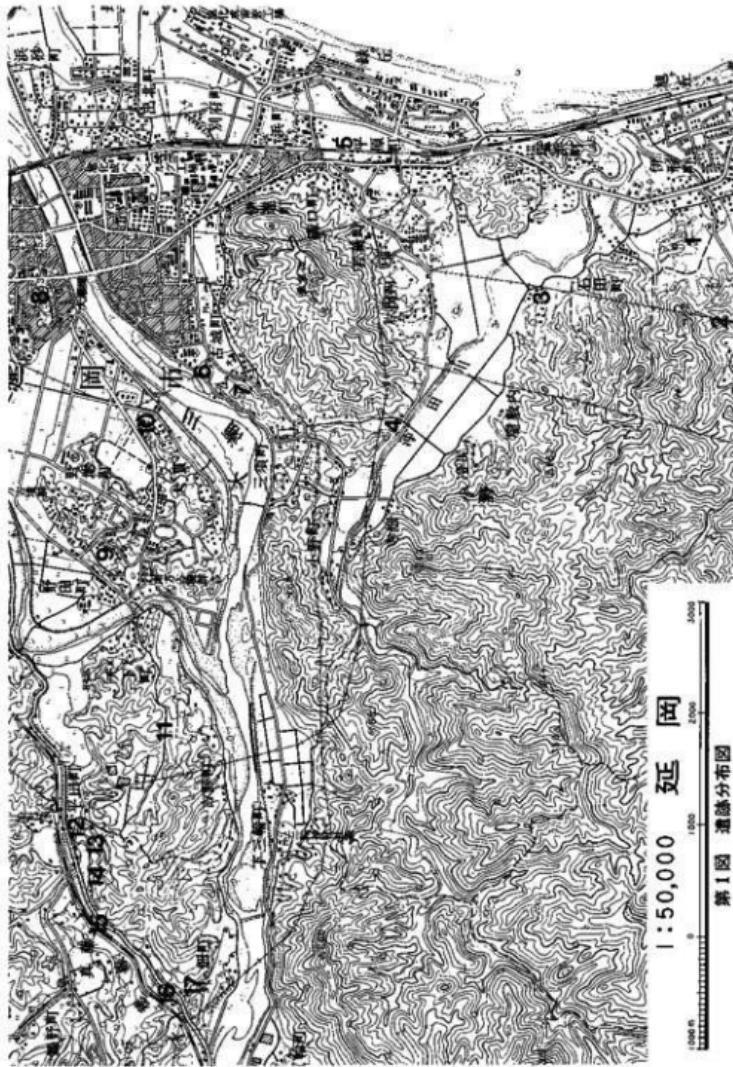
1. 遺跡の位置と歴史的環境	1
2. 発掘調査に至る経緯と経過	2
3. 調査の結果	4
4. まとめ	9

挿図目次

第1図 遺跡分布図	
第2図 発掘調査区及び周辺地形図	3
第3図 A地区焼石分布図	5
第4図 ナイフ形石器実測図	6
第5図 基本土層図	6
第6図 高環形土器実測図	7
第7図 須恵器环身・蓋実測図	7
第8図 挖立柱建物跡群遺構実測図	8
第9図 五輪塔実測図	9

図版目次

図版1 1次調査遠景（北から）・1次調査水田跡検出状態遠景	11
図版2 1次調査水田跡検出状態近景・1次調査高坏出土状態	12
図版3 2次調査遠景（北から）	13
2次調査掘立柱建物跡検出状態（東南から）	13
図版4 2次調査掘立柱建物跡検出状態（東から）	14
2次調査掘立柱建物跡検出状態（南から）	14
図版5 2次調査A地区調査区・2次調査焼石検出状態	15



第1図 遺跡分布図

1. 遺跡の位置と歴史的環境

林遺跡は、延岡市伊形町字林に所在する旧石器時代・古墳時代・中近世の三時期に渡る複合遺跡である。延岡市の中心街から南へ約6kmにあり、日向灘の海岸線からは西へ約1.5kmにある沖積平野に突き出した独立丘陵の標高5~8mの南斜面に立地している（第1図1）。

延岡市における歴史の展開は、平野部に枝葉のように突き出した丘陵と、その丘陵と河川に細分された平野を舞台としている。従って、県央部を中心とした大淀川、一つ瀬川流域のような、広がりを持つ平野とその西に形成された広い平坦面をもつ火山灰台地を舞台として展開する地域史とは、やや趣の異なる様相が看取されるのである。

延岡市における旧石器時代の遺跡は、これまで数箇所の地点において表掲されていたに過ぎなかったが、1985年に発掘調査された赤木遺跡（第1図16）において、初めて旧石器時代の様相が本格的に明らかになった。赤木遺跡では、小範囲の面積のなかで多量の石器および剥片が出土し、県北における旧石器時代の代表的な遺跡となった。第二オレンジ（AT層）までの層位で出土した遺物は細石刃、細石核、ナイフ形石器、尖頭器などである。

続く縄文時代では、県内で顕著な貝塚の少ないなか、早期からの大貫貝塚（第1図10）、後期からの沖田貝塚など多くの貝塚が知られている。また、これも県内では類例の少ない石刀が2本、出土地不明ながら存在する。

弥生時代では、三須町出土の瀬戸内系の上器がある。ことに一段に矢羽透かしをもつ高环形土器は県北における瀬戸内地方との文化交流を知るうえで貴重な遺物である。また石器類の中でも、古川町から出土した石庖丁は、朝鮮半島との関係が注目されている擦切技法による孔をもつ製品で、分布図を考えるうえで貴重な遺物となっている。

しかし、縄文・弥生時代を通じて本格的な発掘調査の経験は少なく、まだ基本的な歴史像を描くに十分な資料を蓄積するには至っていないといえる。

それに対し、古墳時代に関しては、古い調査例ながら大正から昭和の始めにかけての鳥居龍藏による古墳に関する発掘調査があり、また1970年には旭化成工業の造成工事に伴う櫻

- | | | | | |
|-----------|-----------|----------|------------|---------|
| 1. 林遺跡 | 2. 越路遺跡 | 3. 石田石棺 | 4. 片岡貝塚 | 5. 平原遺跡 |
| 6. 古城窯跡 | 7. 井上城跡 | 8. 延岡城跡 | 9. 野田町八田遺跡 | |
| 10. 大貫貝塚 | 11. 南方古墳群 | 12. 高野貝塚 | 13. 上原遺跡 | |
| 14. 上野原遺跡 | 15. 平田遺跡 | 16. 赤木遺跡 | 17. 貝塚遺跡 | |

山古墳群の発掘調査が行なわれている。宮崎平野周辺地域では余り石棺系の埋葬施設をもつ墳墓がみられない中での石棺系の埋葬施設の優位性は、地質的な要因も含め県北における特徴として考えることができる。一方、住居跡については、昭和52年に市道改良工事にともない野田町八田遺跡（第1図9）が発掘され、古墳時代初期の住居が検出されている。

林遺跡に直接関係するところでは、子持ち勾玉を出土した越路の祭祀遺跡（第1図2）がある。越路は、林遺跡のすぐ西方の岬およびその西斜面を指す。偶然の機会による出土ながら子持ち勾玉の出土は、宮崎県内では五ヶ瀬町からの出土二例などがあるのみで類例のくわい資料である。遺跡の性格と歴史的な位置付けは今でも判断としないが、今回の林遺跡の調査で時期的に関係すると思われる須恵器・土師器が出土しており、この二地点の遺跡を結ぶ理解は重要な課題となる。

中世から近世に至っては、城下町として延岡は発展したが、延岡城跡（第1図8）をはじめとする城跡、古城窯跡（第1図6）、小峰窯跡などの近世窯跡など歴史時代の遺跡も数多い。林遺跡においても中世から近世にかけての土器や陶磁器とともに柱穴群が多く検出されているが、延岡市内では初見に属し、それらの位置付けは今後の課題となすしかない。

2. 発掘調査に至る経緯と経過

建設省による一般国道10号土々呂バイパスの建設が計画されるにともない、県文化課で路線内を踏査した結果、伊形町に所在する独立丘陵の南斜面において土器片及び剣片の散在を確認することができた（第2図）。水田部分を含め試掘を行った結果、土師器片などの遺物類の他、柱穴群の一部と古水田の存在を確認した。それをもとに遺跡の規模と調査方法の検討を行い、協議の上、水田跡の可能性から南に展開する現水田面と路線にかかる斜面地を発掘調査することになり、工事計画との絡みで水田跡の調査を昭和61年度に、斜面地の調査を62年度に実施することになった。しかしその後、幾つかの調査計画の変更があり、一次調査の過程では斜面地の一部に調査範囲を広げ、また二次調査では未買収地との関係で一部の調査を次年度以降に回すことになった。

一次調査は水田跡調査のため現水田利用との関係から昭和61年4月14日に現場入りし、宮崎大学助教授藤原宏志氏および古環境研究所の協力をえて、水田面の検出につとめた。その結果、5月9日に珪らしき土層を確認し、以降水田部分では水田跡の面検出を進めた。検出した水田は遺物などの検討から、近世から大きく遡らないことが明らかとなり、河川および海水などとの関係から水田の開発が思うように進まなかった地域史の実体を裏付けた。その間、



第2図 発掘調査区及び周辺地形図

6月3日には畠地部分での柱穴検出も進み、掘立柱建物跡、さらに古墳時代の堅穴住居跡の存在が明らかとなった。

この一次調査の結果、原位置を留めるものではなかったが、ナイフ形石器（第4図3）の出土があり、畠地の部分に旧石器時代の包含層が存在する可能性がでてきた。従って、二次調査は掘立柱建物の検出とともに、旧石器時代層の追及が課題となつた。

二次調査は、昭和62年10月26日に現場入りし、早くも30日にはナイフ形石器の出土をみたが、耕作土中に含まれたもので層位の確定にはいたらなかつた。その後も畠地の上段で剝片および焼石群を検出したが、濃密な分布を示すものではなく、また同層からは製品の出土をみなかつた。一方、掘立柱建物跡については、一次調査で断片的であった柱穴群のはば全体像を捉えることができた。また、旧石器時代を含む遺跡としては標高5～8mというこれまで知られていなかつた低位の遺跡であり、また独立丘陵上という地理的条件の調査のため、山梨文化財研究所外山秀一氏には地理学からの特別調査をお願いしている。

3. 調査の結果

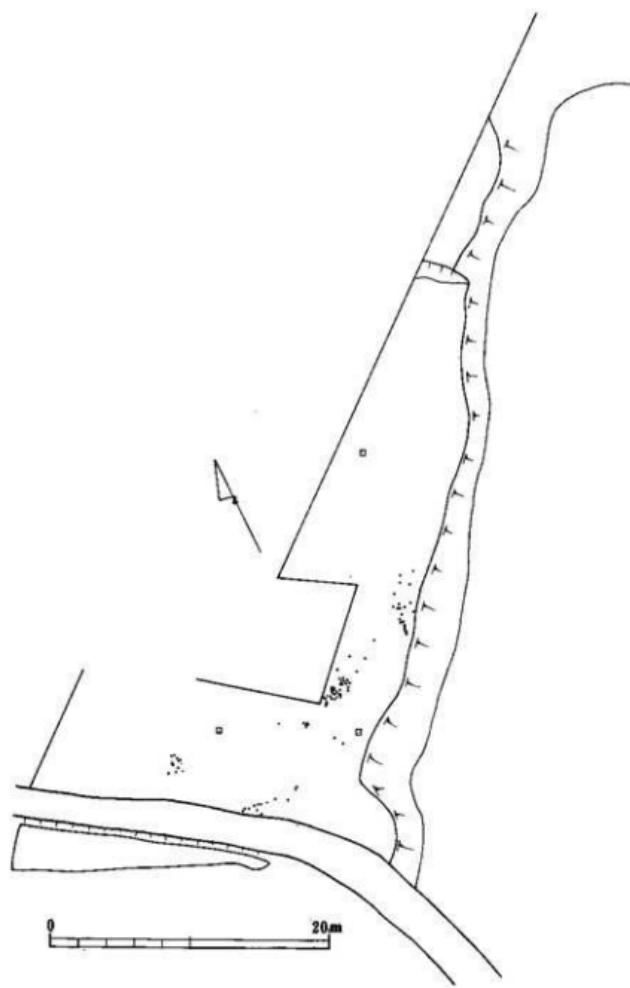
一次調査の結果については、『宮崎県文化財調査報告書』第30集にゆずり、ここでは二次調査の結果を中心に述べる。

調査区は、現農道から北をA区、南すなわち水田面に近い一次調査分を含む地区をB区とする（第2図）。

旧石器時代

発掘開始そうそうB区においてナイフ形石器の出土をみたが、その後の掘下げにかかわらず、旧石器時代遺物の検出は数点の剝片にとどまり、面的な確認にいたらなかつた。比較的層位的に安定していると考えられるA区では逆に、剝片の集中した出土と焼石群（第3図）の検出はみたが、製品の出土がなかつた。調査地は畠開墾のため古くからの開削が進んでおり、より開削のすんだB区で、一・二次調査のさい耕作土中から検出されたナイフ形石器類（第4図）は、上段あるいはB区の削平土中に含まれていたものと考えられる。

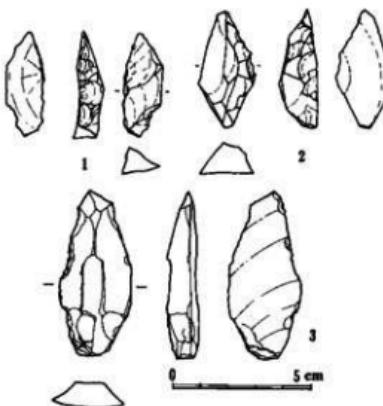
また、外山氏との地理学的調査から、A区耕土直下に比較的土壤化の進んだアカホヤ火山灰層があり、剝片類はその下に包含されるが、以下第二オレンジ（AT層）を含む土層はさらにローム化が進み、第二オレンジ（AT層）との層位関係を解明することはできなかつた（第5図）。



第3図 A地区焼石分布図（縮尺1／400）

出土したナイフ形石器（第4図）
1）は横長剣片を素材とし、一側縁
に丁寧な刃渡し調整が施されてい
る。材料は無斑晶流紋岩である。ま
た、剣片のほとんどが無斑晶流紋岩
である。

焼石群は、三箇所ほど集中化し
た部分があるものの、明瞭な集石
遺構を形成するものはなかった（第
3図）。



第4図 ナイフ形石器実測図（縮尺1/2）

地 面 上	
14	田 耕 土
	青灰色 稲葉混り
	粗 粒 砂
44	砂質灰褐色 ガラス質混り無機物質
55	暗 灰 色 (ヤカモガサ)
70	暗 灰 色 ガラス質混り無機物質
81	暗 灰 色 無機質沙塵リシルト
94	暗 灰 色 シルト混り無機物質 剣 片 包 含
113	暗 灰 色 粘土 塵 シルト
141	暗 灰 色 無機質沙塵リシルト
148	暗 灰 色 網 織 透 ウ シルト
248	青白灰色 砂 賽 + 黑 磁

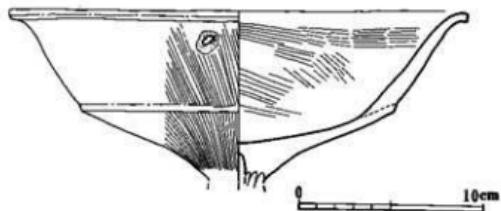
第5図 基本土層図

古墳時代

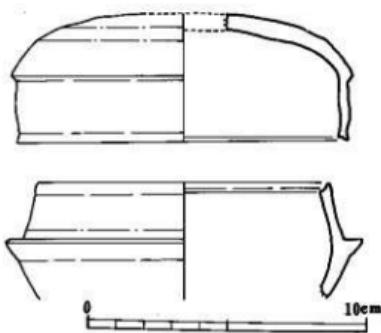
一次調査では3点の土師器の高坏（第6図）が出土し
たが、二次調査では同形式の高坏と共伴するかたちで、
破片ながら須恵器の蓋坏、坏身（第7図）が出土している。
ただ、遺物の属する遺構は密集したピットなどにより乱
され、状態が悪く判然としない。蓋と身はセットで、延岡
市でこれまで確認されている須恵器としては最も古いも
ので、現在の県内の編年ではⅠ期に相当する。身の口径
は10cm、受け部の立ち上がりは高く、やや内傾している。
蓋の口径は11cm、稜は明瞭である。蓋・身とも口縁端部
は内傾し段をもつ。青灰色を呈し、焼成は良好である。

中近世

遺跡は狭い範囲ながら検出された膨大な柱穴群の存在
を一つの特徴とする（第8図）。時期を決定する良好な
資料に乏しいが、ヘラ切り底の坏あるいは内黒土師器の



第6図 高坏形土器実測図（縮尺1／3）



第7図 須恵器坏身・蓋実測図（縮尺1／2）

存在から、平安時代前半の10世紀頃を上限とするものと考えられる。柱穴群の中で注目されるのは、直徑約90cmの県内でも比較的大規模な柱穴で構成される孤立柱建物である。梁行3間、桁行5間の南北棟で、 $5 \times 10m$ を計る。

また、調査区内には地輪など原位置を留めるものではなかったが五輪塔が残されていた。空風輪・火輪・水輪・地輪などいずれも比較的小型のものに限られている（第9図）。隣接の竹林にも多くの五輪塔が散乱しており、古く寺院が存在したとする伝承が地元に伝えられている。



第8図 捜立柱連物跡群遺構実測図 (縮尺 1 / 300)

4. まとめ

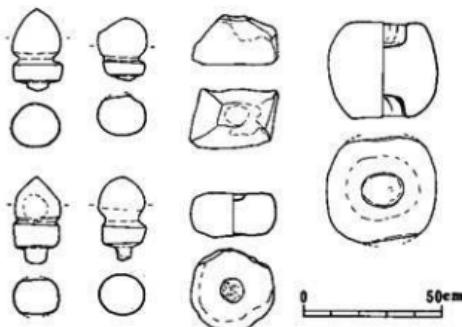
林遺跡の地理的な立地条件については、3次に引き継いで解明すべき課題が残されている。その最も大きな課題は、出土したナイフ形石器の時期に、同地がどのような地理的条件下にあったかである。海岸線の復元、および河川流路の復元などは1万数千年前の生活を考える上で欠かすことできない。また、今回の地

理学的調査の結果は、丘陵と

その前庭ともいるべき遺跡部分について非常に変動の激しい土の動きを示唆している。そうしたなかで第二オレンジとの層位関係の把握は、今後の重要な考古学的な課題である。

古墳時代の遺物については、今後の調査地からの新たな発見の可能性は薄く、一次・二次調査の成果をもとに積上げるしかないが、住居跡様の掘り込みの残存を一次でわざかに確認しているものの全容を捉えることができない。また、遺物量も多くはない。狭い地理的な立地条件も含め、そうした要因から推定されるのは、拠点的な集落ではなく、中繼地的な小集落が想定され、あるいは高坏の相対的な多さは祭祀を示唆するものであろうか。

中近世の掘立柱建物については三次に残された箇所の調査をもって初めて全容が明らかとなる。したがって、掘立柱建物各棟の時期決定、およびその構成についての検討は本報告に委ねることにする。

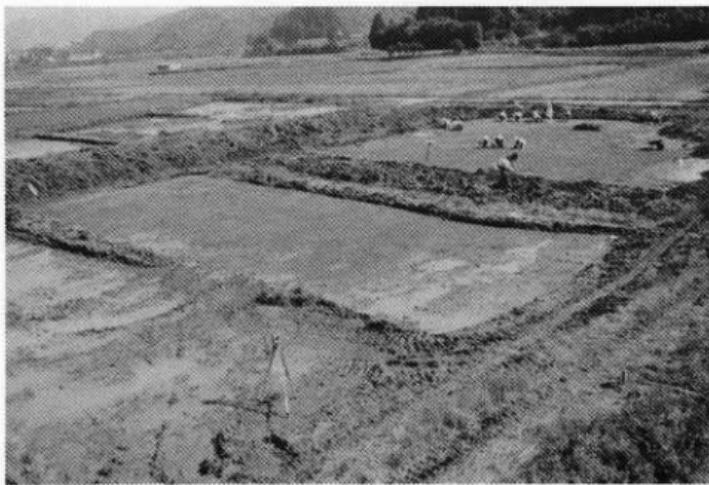


第9図 五輪塔実測図（縮尺1／20）

図 版



1次調査 遠 景（北から）

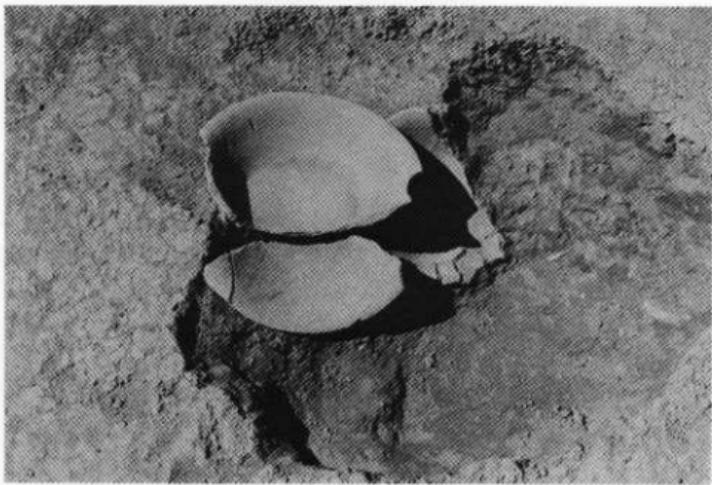


1次調査 水田跡検出状態遠景

図版
2



1次調査 水田跡検出状態近景



1次調査 高坏出土状態



2次調査 遠景（北から）



2次調査 捜査柱建物跡検出状態（東南から）

図
版
4



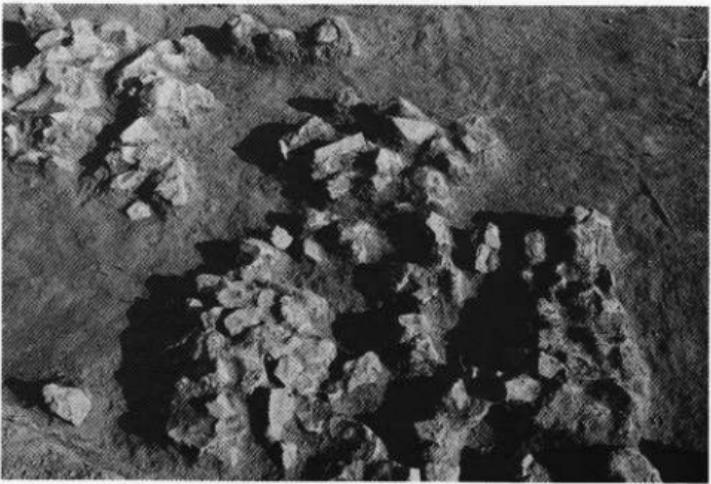
2次調査 振立柱建物跡検出状態（東から）



2次調査 振立柱建物跡検出状態（南から）



2次調査 A地区調査区



2次調査 焼石検出状態

一般国道10号土々呂バイパス建設関係
発掘調査概要報告書

林 遺 跡

発行年月日 昭和63年3月19日

編 集 宮崎県教育庁文化課
発 行 宮崎県教育委員会